

活躍の場はひとつじゃない：社会運動というフィールド

【開催日】2024 年 2 月 9 日（金）12：15～13：30（オンライン開催）

【講師】森山 拓也 先生（NPO 法人「気候ネットワーク」職員／環境アクティビスト）

博士：グローバル社会研究

今回は、2020 年 3 月に同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程を修了し、現在は、NPO 法人「気候ネットワーク」において、気候変動・エネルギー政策に関する調査やキャンペーン運営、広報活動などに従事するほか、パワーシフト・キャンペーンなど様々な社会運動に関わっておられる森山拓也先生にご講演を頂きました。

1. 自己紹介

現在は、NPO 法人「気候ネットワーク」に勤務しています。まずは、環境団体に働くようになった背景からご説明したいと思います。私が保育園に通っていた頃に、自宅の隣にあったお寺で建て替えのための解体工事がありました。その時に祖父母が、瓦礫に埋もれていた、生まれたばかりのムササビの子供を見つけ、保護しました。これを「卍ノ介（まんじのすけ）」と名付け、元気になるまで育てて森に帰すという経験をしました。ムササビは野生動物なので、専門家のアドバイスをもらいながら育てました。順調に成長してからは、夜になると裏山の方へ飛んだりするようになりました。大人になると、一週間くらい出かけたままになり、次第に外出期間が数か月間に伸び、長い時には半年ぶりに帰ってきたりして、最後は完全に野生に戻っていきました。ムササビと暮らした経験を通じて、卍ノ介が暮らす森に安心して眠れる場所はあるかとか、食べ物はあるかとかを考えるようになり、自然環境に関心を持つようになりました。私が中学生の時には、アメリカで 9.11 同時多発テロ事件が発生し、その後、アフガニスタンへの攻撃が始まりました。さらに数年後には、イラクへの攻撃も始まり、毎日のようにテレビで中東の様子が報道されていました。それを見て、中東地域とは、どのような場所なのだろうと関心を持ちました。2003 年にアメリカ軍がイラク攻撃を開始しようとした際、これに反対するデモが世界中で起きたのですが、日本で開催された反戦デモに私も初めて参加し、社会運動にも関心を持つようになりました。2011 年には、福島で原発事故が発生し、原発の問題やエネルギー政策にも関心を持つようになりました。2012 年に当時の民主党政権が、停止していた原発の再稼働を進めようとした時に、全国で反原発の動きが盛り上がりました。私も色々な活動に参加しましたが、この時には、同志社大学でも反原発集会があり、政治家になる前の山本太郎さんが演説され、多くの学生が集まりました。この後、京都駅前にある関西電力の京都支店前のデモにも参加しました。また、私の在学中の大きな動きとしては、2015 年に戦争法案反対運動があり、SEALDs のような学生を中心とする若者の活動に関心を持ちました。

現在、勤務している気候ネットワークは、京都で設立された NPO で、地球温暖化や気候変動防止のために市民の立場から、政策提言や情報発信、人材育成などに取り組んでいます。活動の領域は広く、国際、国内、地域の 3 つのレベルで活動しています。まず、国際については、国連気候変動枠組条約締約国会議（COP）に毎年職員を派遣するなど、国際的なルール作りに関わったりしています。また、国内では、国のエネルギー政策への提言、情報公開と分析、企業活動の監視と働きかけなどに取り組んでいます。地域レベルでは、自治体の脱炭素化支援や人材・ネットワークの育成などに取り組んでいます。特に力を入れている取り組みの一つは、脱石炭火力のキャンペーンです。石炭火力発電は気候変動の原因となる CO₂ を大量に排出するため、先進国は 2030 年までに石炭火力をゼロにすることが国際的に求められていますが、日本は未だに石炭火力に依存しています。G7 の中では、日本だけが、石炭火力ゼロに向けた具体的計画を持っておらず、国際的に非難されています。そのため、「Japan Beyond Coal」(<https://beyond-coal.jp/>) というキャンペーンを通じて、脱石炭に関する国内外の最新情報を発信し、日本でも 2030 年までに石炭火力をゼロにすることを目指しています。これに加え、政府の GX（グリーン・

トランスフォーメーション）政策の問題点を明らかにすることやエネルギー基本計画の策定に向けた政策提言にも力を入れています。さらに、企業のグリーンウォッシュ対策にも取り組んでいます。グリーンウォッシュとは、実態を伴わない見せかけだけの環境配慮で自社や商品のイメージを高め、消費者を騙す広報戦術のことです。電力事業者やエネルギー関連企業が自社の脱炭素化や気候変動対策をアピールする広告が増えてきていますが、実際に行われているのは、気候変動対策に逆行する取り組みであり、グリーンウォッシュになっている事例が多数あります。気候変動対策におけるグリーンウォッシュは国際的にも問題視されていますが、日本では、まだ認識が進んでいないため、問題提起にも力を入れたいと考えています。なお、いま私が担当している主な業務は、会員向けのニュースレターの編集、Japan Beyond Coal の運営、記事の執筆、発行物やチラシのデザイン・レイアウト組み、動画制作、イベントの企画・運営などです。

「気候ネットワーク」以外にも、いくつかの活動に参加しています。韓国、台湾、フィリピン、インドネシア、インド、トルコなどアジア各国で原発に反対する市民のネットワークである「ノーニュークス・アジアフォーラム」(<https://nonukesasiaforum.org/japan/>)には、学生の頃から関わっていました。大学院ではトルコについて研究していたので、トルコに関する記事を書いたり、トルコ語の記事を翻訳したり、トルコの活動家が来日する際のコーディネートを担当したりしました。また、市民アンバサダーとして、自宅の電力を100%再生可能エネルギー由来のものに変える「パワーシフト」(<https://power-shift.org/>)というキャンペーンに、市民アンバサダーとして参加しています。マンションやアパートに住んでいる方でも5分から10分の手続きで電力の契約を再生可能エネルギー100%の電力会社に変えることができるのですが、これを普及させるための活動です。アクティビスト仲間と立ち上げた「TSU-RU（ツール）」(https://www.instagram.com/tsu_ru_activism/)では、社会運動をより多くの人にとって身近で役立つ手段にするため、様々な分野で活躍するアクティビストにインタビューを行い、SNSやブログ記事で紹介しています。この他にも、気候変動の問題に取り組んでいるNGOの職員や研究者、学生の中から歌や楽器が得意な方々が集まり、「Climate Activists' Concert」というイベントも企画しています。

このように様々な場所で活動をする中で、大学院や本業で得た経験やスキル、人脈を活かしながら活動しています。また、職場以外での経験や人脈も活かすことができていると感じています。

2. 博士課程ではトルコの反原発運動を取材

博士課程では、トルコの反原発運動について研究を行っていました。私は、東日本大震災で福島原発事故が起きたのをきっかけに、原子力発電の問題やエネルギー政策について関心を持つようになり、日本国内での脱原発運動にも参加しました。そうした中で、これだけ多くの市民が反対の声を上げているにもかかわらず、どうして原発の再稼働を止められないのだろうかということで、エネルギー政策と民主主義の関係に関心を持つようになりました。この間に、日本がトルコに対して原発を輸出するという動きが始まったのですが、現地の人達はどういう反応を示しているのかを知りたいと思い、トルコの反原発運動を取材するようになりました。取材の成果は、論文としてだけではなく、ドキュメンタリー映画としてもまとめ、映画祭で上映するという活動も行いました。博士課程での研究の内容については、著書『原発と闘うトルコの人々』(<https://www.akashi.co.jp/book/b592675.html>)として出版しておりますので、関心があればご覧ください。当時、日本は、トルコの北部にあるシノップという街に原発を建設する計画を立てていたのですが、実際に足を運んでみると、大規模な反対集会が開催されていました。黒海を挟んだ対岸にはウクライナがあり、チェルノブイリ原発事故が起きた時には、トルコも深刻な放射能汚染の被害を受けました。シノップも被害を受けた地域の一つであり、住民の方々の問題意識も強い地域でした。地元の反原発デモで掲げられた横断幕には、「福島原発事故は終わっていない」と書かれており、日本人は原発の危険性を一番分かっているはずなのに、なぜ原発を輸出しようとするのかと訴えていました。また、デモ参加者のプラカードには、トルコの有名な詩人が日本の第五福竜丸事件を題材にした作品を引用しながら、核と人間は共生できないと訴えるメッセージも掲げられていました。

3. 博士・大学院生の就職活動

次に、就職活動の方へ話題を進めたいと思います。文系と理系でも、随分、雰囲気が違うかと思うのですが、

私は文系だったため、主に文系の方々向けにお話を用意しました。今回は、学部生の参加者も多いと伺っているので、なるべく、一般的な内容になるようにお話しします。まずは私自身の就職活動のスケジュールを振り返ってみます。

大学院に入る前後から、大学院生向けの就職情報を発信しているアカリクの本を読み、大学院には行くけれども、研究職以外の就職という進路も意識するようになりました。博士前期課程と後期課程の時にも新卒向けの就職活動はやってみたのですが、結果的にはうまくいかず、中断しています。また、後ほどお話ししますが、後期課程に在学中に就職して、そこでフルタイムで働きながら博士論文を完成させて、大学院を修了しました。その後、転職して、現在の仕事をしています。後期課程2年目の時に、少し長めのインターンシップに参加して、3年目の4月から新卒採用の就職活動を開始しました。この時点では、後期課程は3年で修了するという前提でしたが、就職活動はうまくいかず、夏くらいに中断することになりました。そこで、研究の方に改めて力を入れてみようということで、研究計画を練り直し、トルコでの現地調査に向かいました。そして、4年目から休学して、調査のためトルコに長期滞在しました。この現地調査から帰ってきて、日本で博士論文を書き始めたのですが、6年目の時に、「ピースデポ」という、核廃絶・軍縮に取り組むシンクタンクのNP0へ就職しました。そして、7年目に後期課程を修了しました。そのため、学部生の方が聞くと驚かれるかもしれませんが、前期課程に2年、後期課程7年ということで、合計で9年ほど大学院に在籍しました。文系か理系かによって、だいぶ違うかと思いますが、文系(人文科学・社会科学系)の大学院生では、博士号取得に10年近くかかることは珍しくありません。

4. 在学中に考えていた就職への不安

まず、大学院では一定の専門性を身につけるので、それを活かしたい、無駄にしたくないという気持ちがありました。なるべく、自分の研究経験を直接活かせる仕事がしたいと思っていました。大学院に在学中の方はわかるかもしれませんが、アカデミア以外に就職するということは「負け組」だと見なす雰囲気も、まだ残っていると思います。その一方で、アカデミアの道に進む研究者というのは、いばらの道で暗い話がたくさんあります。研究職に就こうと考えていても、就職がとても大変で、現在は、ポストもかなり減っていますし、応募する際にも、ものすごく大量の書類が必要になります。また、競争率もとても高いです。もし、運良く、就職できたとしても3年とか5年の任期制のポストがほとんどで、任期が過ぎる前に次の仕事を探す必要があり、かなり不安定な時期が続きます。さらに、大学の研究環境の悪化ということも、色々なところで言われていて、資金難で研究費が確保できなかったり、研究以外の校務が忙し過ぎて、研究が十分にできなかったりということもあります。これが、日本の研究力の低下を招いているという指摘もあります。

それでは、大学以外に就職しようと思った時に、博士を採用してくれる場所はあるのだろうかと考えることになりますが、大学の外で働く文系博士のロールモデルは少なく、就職の当てはあるのだろうかと不安に思うこともありました。また、大前提として、いつ博士論文が完成するのかという問題もあります。皆さんも最初のうちは、3年で完成させるぞと意気込んでいるのですが、途中からは5年目に終わらせたいとなって、それでも書けない場合も出てきます。また、先輩や後輩たちが、いつの間にか大学院から姿を消しているというケースもよくあり、一緒に入学した人全員が、修了までたどり着けるというわけではありません。

5. シューカツ（新卒一括採用）と博士論文の両立は難しい

就職活動については、博士前期課程と後期課程の双方で経験したのですが、スケジュールや選考方法は、学部と大学院で違いは全くありません。大学院生も学部生と同様に、自分で各企業に応募して選考を受けます。私の場合には、インターンシップに参加した企業の他、報道記者職に関心があったので、報道機関を中心に応募しました。シューカツ自体が大変ですが、大学院生の場合は、研究との両立が難しいと考えています。日本企業の新卒採用は、学生のうちに就職活動を始めて、卒業する前に内定をもらうという方式ですが、その分、勉強や研究に割ける時間が短くなります。特に、2年間しかない博士前期課程でシューカツを実施すると、実質的に、研究に集中できるのは1年しかないことになります。自分の研究活動に追われながら、SPIや専門試験の対策、報道機関を受ける場合には、政治や社会等の時事問題に関する試験の対策も必要になります。また、エントリーシートを沢山書いたり、面接の練習をやったりしていると、なかなか研究との両立は難しくなります。大学院まで進んでいると、就職の面接でも自分の研究の話をしたいと思うのですが、それだけでは、評価されにくいと思いま

す。研究内容が、全く評価されないわけではないのですが、研究内容に理解がある職場というのは、そう多くはありません。それだけをアピールしても評価はされませんし、学部生と一緒に選考を受けているので、年齢が高い分、不利になるという側面もあります。そのため、アピールの方法については、工夫する必要があります。また、年齢制限もあるので、新卒採用に応募しようと思うと、制限が緩いところでも、30歳を越えると応募できないという場合が多いです。明確に制限は書いていないのですが、年齢が高めの人が新卒採用に応募すると、はねられる場合も少なくないと思います。今はどうかかわからないのですが、自分が受けていた頃は、報道機関、新聞社とかテレビ局の場合は、30歳までは応募可能となっていました。これを越えてしまうと、応募すらできなくなってしまいます。

6. 在学中に NP0 に就職

次に、在学中に NP0 に就職した背景ですが、就職への不安というのが、かなりありました。この時には、自分の年齢も 30 歳前後だったのですが、30 歳を越えてしまうと、日本の企業では新卒採用の対象外になり、応募ができなくなります。一方で、ずっと大学院にいと職務履歴がないので、中途採用にも応募できません。そうになると、どこにも応募できないということで、就職は詰んでしまうという不安が大きくなりました。やはり、博士の就職先は大学しかないのかと思うようになります。そんな中で、学会のメーリングリストで核廃絶・軍縮シンクタンクの NP0 の公募を見つけて、少しでもチャンスがあればと思って応募した結果、運良く採用してもらいました。この時は、トルコに関する研究を行っていたので、核廃絶問題というのは、テーマがぴったり当てはまるものではなかったのですが、研究内容よりも研究を通じての基礎スキルや価値観から、自身をアピールしました。結果として、大学院を修了する前に、在学しながら働くことになったのですが、大学院生の場合、学士号を持っているので、相手の企業や組織側が許せば、在学したままでも就職が可能です。また、大学院生が在学中に就職できる選択肢として、外務省専門調査員という制度もあります。これは任期があつて、長くても 3 年くらいになりますが、海外の日本大使館で研究補助のような仕事に取り組みます。大学院に在学中の学生が応募してくるという前提で運営されており、自分の周囲にも専門調査員として働く大学院生が何人かいました。

7. NP0 の研究員として働きながら博論執筆

NP0 で働いてみると、異なる分野でも、研究の経験やスキルが使えるということを実感しました。この職場では、核廃絶・の交渉や宇宙空間の軍事化、AI・ロボット兵器のように、今まで取り組んだことのないテーマについて、リサーチしたり記事を執筆したりしました。この中で、新しい分野であっても様々な情報を集めて記事を書いて発表するという基本的な研究スキルを活かすことができたと実感しました。この時には、研究活動の他にもニュースレターの編集長として、企画・編集を担当したり、ファンドレイジングに関わったりしました。小さな職場で、職員が私 1 人しかいない時期もあったので、本当に色々な業務を経験しました。ただ、フルタイムで働きながら博士論文を執筆するというのは、すごく難しいことで、半年間、休職して論文執筆に集中しました。その後、復職後に博士論文を提出して、博士課程を修了しました。修了後も 1 年くらいは、この NP0 で働いたのですが、博士論文を書き終えて、少し余裕ができたので、専門学校にも通って、映像編集やグラフィックデザインソフトの操作を学びました。

8. 博士課程修了後に転職活動

博士課程修了後は、新たな経験を積むために転職活動を始めました。この時は、大学や研究機関に加え、出版・メディア業界、国際協力団体や人材開発団体、環境団体などに応募してみました。その際、新卒のシューカツや大学への応募と比べ、一般企業の中途採用への応募はずっと楽だと感じました。個人的な感覚かもしれませんが、新卒の就職は、企業ごとにフォーマットが異なる履歴書やエントリーシートを書かなければならないので、1つ1つに多くの時間をかけていました。転職活動の場合には、履歴書や職務経歴書を使い回すこともできますし、新卒採用の場合のエントリーシートみたいなものもありません。新卒採用のエントリーシートには、「あなたを動物に例えて書いてください」とか、「あなたの人生で、一番、辛かったことを書いてください」といった難しい質問があり、準備にとっても時間がかかります。中途採用の場合には、そういうものはなく、これまでの仕事でどういうことをやってきたのかという経歴書と、新しい仕事でどういうことをやりたいかという志望動機だけにな

ります。また、様々な転職支援サービスを活用することもできます。転職の場合には、今までどのような仕事に取り組んできたかという職務履歴と、これを基に何ができるかということが重要です。新卒採用の場合には、仕事の経験がないので、意気込みや今後の「伸びしろ」が評価されますが、中途採用では、これまでの具体的な成果が評価されます。

9. 大学院生の就職活動のポイント

大学院生として就職活動を行った経験からのアドバイスになりますが、あまり、自分の研究テーマだけをアピールしないということが重要です。アカリクの『大学院生、ポストドクターのための就職活動マニュアル』（亜紀書房、2017年）には、①コア能力、②基礎的教養、③専門分野全般、④自分の研究テーマで構成されるピラミッド形の図が紹介されています。このピラミッドの一番上に、「自分の研究テーマ」があるとすると、その基礎として、より裾野が広い「専門分野全般」があります。その下に、語学能力を含めた情報収集能力や論文の読解力と理解力等の「基礎的教養」、さらにその下に、自分で時間管理をして、締め切りまでの仕事を終わらせる等のどこに就職しても役立つような「コア能力」があります。そして、就職の時には、「自分の研究テーマ」を直接的に活かせる機会は、ほとんどありません。この部分だけアピールすると、「この人はこだわりが強く、頭でっかちで使えない」という印象を持たれてしまいます。そうではなくて、どこに行っても対応できる力を自分が持っていることをアピールできると、良いのではないかと思います。例えば、「一定以上のクオリティで文章や資料を作成し、分かりやすく発信できる」、「国内外から広く情報を収集し、知識として吸収できる」、「大量のデータをすぐに活用できる」等のようにアピールする方が、採用担当者に評価されやすいと思います。実は、このような基礎的な能力というのは、大学院に行かなくても獲得できます。学部でも獲得できますし、学部卒業後に就職し、働きながら能力を高めていくこともできます。そのため、このような基礎能力を高めるためだけに大学院へ進むというのは、少し違う気がします。やはり、大学院へ行くのであれば、どうしても取り組みたい研究テーマがあることが前提になるかと思います。研究テーマの専門性を高めながら、それ以外の分野で応用可能な力も身に付ければ、将来的に、この力を他の分野でも活かすこともできるし、就職活動でもアピールすることができます。

10. 偶発性もキャリアを発展させる

キャリアの発展には、偶発性も大事なかと考えています。もちろん、目標や計画を立てることは重要ですが、それに縛られ過ぎないことも大切です。人生やキャリアというのは、予測ができない部分もあります。好奇心や楽観性、柔軟性を常に持って、状況に応じてキャリアを切り拓いていく、最初の目標とは違うけれども、チャンスが舞い込んできたときに、活かせるような姿勢を持っていた方が、キャリアは発展しやすいような気がします。大学院生が就職活動をすると、面接で「大学院まで行っているのに、研究者にならなくて良いのですか」と聞かれることもあります。そうではなくても良いと思います。子供の頃から、ずっとサッカーをしてきた人が、全員、プロサッカー選手になるわけではありません。大学院生も、長年、取り組んできた研究テーマ以外の道に進んでも、全く問題ないと思います。本当に研究者として、自分の研究テーマを追求したいという気持ちがある場合には、それ以外のことには、脇目も振らないというのも一つの生き方かもしれませんが、もう少しアンテナを広げると、多様な可能性が見つかるかもしれません。私の場合にも、自分の研究テーマであるトルコの反原発運動に関する研究を続けたいとばかり思っていたら、核廃絶・軍縮に取り組む NPO の公募を見ても、自分とは関係ないと考えて、応募しなかったかもしれません。当初の計画と違うけれども、思いがけないチャンスを見つけた時に、ちょっと切り替えてみるとか、こういう道もあるかもしれないなというふうに、柔軟に状況に合わせて道を切り拓いてみるのも良いかもしれません。

11. 求人情報の収集

求人情報の収集に関する事例になりますが、新卒採用の場合には、リクナビやマイナビがあります。そして、JREC-IN (<https://jrecin.jst.go.jp/seek/SeekTop>) は、研究者向けの公募情報になりますので、大学院生の方は、ご存知かもしれませんが、NGO/NPO 等の仕事に関しても情報が掲載されることもあります。JICA Partner (<https://partner.jica.go.jp/>) というのは、JICA が運営している求人サイトですが、ここには国際協力系を中心に、NGO や開発協力に関係する企業等の求人情報が集まっています。また、私が最初に就職した NPO の情報

は、所属していた学会のメーリングリストで回ってきました。このように大学院生の場合には、学会等のメーリングリストで情報を得る場合があることも覚えておいてください。また、SNS や口コミ、企業や団体の広報からも情報を得ることができます。

12. 労働法を学ぼう

労働法を学ぶことは、非常に大事だと思っています。労働法は、労働者を守るための武器であって、働く人全員に関係します。実際には、労働法を知らないまま就職の方がほとんどですが、それは、ルールを知らないまま試合に出るようなもので、相手に反則をされても気づくことができません。労働法は、法学部以外の方は触れる機会もないかと思いますが、大学の就職・キャリア支援部門では、この法律に加え、その活用方法、職場でトラブルがあった際の対処方法についても教えて欲しいと考えています。就職活動の時だけではなく、就職後の職場や、学生時代のアルバイト先でも役に立ちますので、知っていて損はありません。

13. 家事や健康管理も重要なスキル

キャリアセミナー等では触れられないかもしれませんが、家事や健康管理も仕事を続けるうえで重要なスキルです。家事は、House Keep とも言いますが、これができないと、部屋が荒れ、着ていく服がなくなり、健康を損ねて仕事が続けられなくなります。家事の能力が高いと食費などの出費も抑えられます。中途半端な仕事のスキルよりも、家事能力を高めることをお勧めします。

14. 経験やスキルを活かす社会運動という舞台

最後になりますが、経験やスキルを活かす舞台の一つとして、社会運動を紹介したいと思います。キャリアや専門性、スキル等を活かす舞台や、社会に貢献する方法と言うと、収入を得る場ということが最初に思い浮かぶかもしれません。ですが、労働者としてだけではなく、政治参加や社会活動など、市民としての領域や、趣味や家庭生活を通じての私的な領域にも、活躍の舞台があります。そういった場では、本業とは違う特技を活かしたり、本業と共通するスキルを活かしたりすることもできます。或いは、社会活動や趣味で得た経験や人脈を本業で活かすこともできます。また、研究での経験を本業の職場以外で活かすこともあるかもしれません。例えば、気候変動について大学院で研究してきたから、その経験を活かしたいと思った場合には、職業として、気候変動の研究者になるという以外の方法もあります。職業として選ぶ場合にも、環境団体であったり、再エネの電力会社で働いたり、関連する製造業であったり、脱炭素を進めていく自治体の職員、ジャーナリストのように様々な方法があります。地方議員や国会議員になるという方法もありますし、投資家として、企業の脱炭素への取り組みを促すという方法もあります。収入を得る仕事として、気候変動とは全く関係のないものを選んだとしても、在野の研究者として、余暇時間を使って研究を続けることもできます。研究以外でも環境団体のボランティアとして活動したり、入会や寄付によって環境団体の活動を支援したりすることもできます。さらに、自分自身が市民活動に参加するという方法もあります。社会運動には、個々人の困りごとを「社会問題」として可視化させ、問題提起するという役割があります。また、提言を行って法律や企業等の行動の改善を促す役割や、行政が提供できていないような社会に必要なサービスを自分たちで提供するという役割もあります。このような活動の中では、専門的スキルを活かせる機会が、沢山あると思います。

15. 社会運動に関わるための様々な方法

社会運動に関わる方法についても、色々あります。私は、環境 NGO に所属して、収入を得ながら関わっていますが、これ以外にもソーシャルビジネスという形で、収入を得ながら関わる方法があります。さらに、自分の持つ専門的なスキルを活かしてボランティアのような形で社会運動に関わる「プロボノ」もあります。例えば、デザイン会社に所属しているデザイナーが、自分のスキルを使って、週末に NPO 等のウェブサイトの作成を手伝うといった方法です。研究者としては、社会問題の実態調査や、議論を深めるためのデータ収集といった「調査型アクティビズム」によって貢献することもできます。職業としての他にも、ボランティアや一市民として活動に参加する方法もあります。例として、「ゼロエミッションを実現する会」(<https://zeroemi.org/>)の活動を紹介します。ゼロエミッションを実現する会では、全国の市町村で、市民が自分の住む自治体の気候変動対策の強化

を目指し、専門家、NGO、行政、事業者などと連携して活動しています。ここで活動している人の多くは、普段は一般企業や学校など、それぞれの職場で働いている方や子育て中の方などで、それぞれの特技やスキルを活かしながら活動に貢献しています。社会運動で活用できるスキルというものは沢山あって、普段の職場では活かしきれないスキルや特技を、社会運動で活かせることがあるかもしれません。

16. NPO／NGO での仕事

NPO や NGO での仕事は、一般企業（株式会社）での仕事と何が違うのかを考えてみたいと思います。株式会社で働いても、もちろん社会貢献は可能ですが、一番の目的は株主のための利益を増やすこと、株価を上げることになります。例えば、上司に対して環境保護に貢献する企画を提案し、それが本当に素晴らしいものであっても、儲けが少ない場合には採用されません。利益に繋がらない活動は、実施しにくいと思います。これに対して、NPO や NGO は、営利活動ではなく問題解決が目的なので、環境に対して良いインパクトを与える企画がやりたい場合には、収益性とは関係なく、実現できる可能性が高いと思います。

17. NGO や NPO への就職

NGO や NPO への就職については、新卒定期採用は、あまりなくて、即戦力のある経験者の採用が多いです。ただ、一般的な企業と比較して、大学院での研究活動が評価されやすいと思います。私の周囲にも、NGO/NPO の職員には、博士号の取得者や大学院に通っていたという方が多い印象があります。分野によっては、研究内容に近い内容の業務を担うことも可能です。また、中途採用であったり、インターンシップやボランティアを学生時代から続けていて、そのまま、採用されたりという道もあります。大企業であれば、定期的な採用活動が行われますが、NGO や NPO の場合には、誰かが退職して後任が必要な場合や、新しい財政基盤が獲得できた時、強化したい活動分野がある時などに募集が行われます。そのため、いつ採用に関する情報が出るかということは、外からは分かりにくいです。NGO/NPO への就職に興味のある方は、普段から採用に関する情報が得られるように、JICA Partner のようなところに登録したり、気になる団体の SNS をフォローしたりしてください。

※ ご講演の後、参加した学生との間で質疑応答も行われましたが、内容については、省略します。

【文責：高等研究教育院 加治木紳哉】

オンライン開催

事前申し込みが必要です

2023 年度 第 3 回「博士キャリアカフェ」2月9日(金)12:15～

活躍の場はひとつじゃない :社会運動というフィールド

本学では、キャリアパス支援の一環として、アカデミア、企業、官公庁等を問わず様々な分野の博士学位取得者の方から、ご自身の経験や現在の状況について伺う「博士キャリアカフェ」を定期的を開催しています。講師の先生と、ざっくばらんに意見交換ができる貴重な機会となりますので、奮ってご参加ください。
なお、参加をご希望の方は、事前にお申し込み下さい。

【講師】

森山 拓也（もりやま たくや）先生 博士:グローバル社会研究
認定 NPO 法人 気候ネットワーク職員/環境アクティビスト

【プロフィール】

2020 年 3 月、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程修了。NPO 法人 気候ネットワークで気候変動・エネルギー政策に関する調査やキャンペーン運営、広報活動などに従事するほか、パワーシフト・キャンペーンなど様々な社会運動に関わる。著書に『原発と闘うトルコの人々:反原発運動のフレーミング戦略と祝祭性』(明石書店)など。

【日時】

2024 年2月9日(金)12:15～13:15(ご講演 30 分, 懇談 30 分)
Zoom によるオンライン開催

【対象】

本学の学生及び教職員

【申し込み方法】

- ・ 本ガイダンスは Zoom によるオンライン開催となりますので、事前申し込み制とさせていただきます。
- ・ 2月8日(木)15:00までに、右のリンクもしくは QR コードからお申し込み下さい。参加用の URL をお送りいたします。



<https://forms.office.com/r/yWbGEs9JJJ>

本件に関するお問合せ先:研究開発推進機構研究企画課
TEL:0774-65-8257
Mail: ji-kenkak@mail.doshisha.ac.jp